

村内の不和

——“The Sculptor’s Funeral”における芸術家の悲劇——

大 田 祐 慈

論文要旨

前稿 “From Clover to Cemetery: The View of Life in ‘Neighbour Rosicky’” は農家の牧歌的生活に焦点を当て、そのロマン主義と神話的表現を解釈したが、本稿では Willa Cather (1873-1947) の初期短編「彫刻家の死」(“The Sculptor’s Funeral” (1905)) における寒村を舞台にした芸術家の悲劇をもとに、喪の表象をはじめとする象徴主義の意義と経済と芸術が相容れないという「逃避主義」との思想的関連を明らかにすることを目的とする。

主人公の Harvey Merrick は東部で若くして成功した彫刻家であったが亡骸となり、教え子である Henry Steavens に伴われて帰郷する。冒頭の「雪が全てを深く降り込めてしまっていたので、淡い星光の中でひろく白い草原の先の崖の稜線がすっきりした空を背に柔らかで、烟る色の曲線をなしていた。」という Kansas の架空の街の雪景色は印象派の絵画を思わせる描写となっている。Cather は厳冬を凌ぐ移民者の生活をよく書いたが、このような荒涼とした風景は死の陰鬱さを暗示し、しかも生を謳歌する春の野と鋭く対比をなす。南北戦争 (1861-65) 以後、村民は物質主義の傾向を強め実利を重んじる結果、喪の表象である棺の上の棕櫚の葉に無関心であるばかりか、故人の実務能力の欠如をあげつらうほど性悪であることが Steavens の目を通して観察される。

母 Annie の粗野な振る舞いは、周囲の他者を傷つけるもので Harvey を苦しめたであろう要因の一つであるが、使用人の些細な不始末への彼女の激昂により、父 Martin もまた健康を害している。このように、Cather は単に田園生活の気楽さについての礼讃者ではなく、「金びか時代」が露呈するまやかしと主義主張のなさを問題にしている。社会の不正に対する批判は、彼女の記者としての経験によるもので、「逃避主義」という論考では「宗教と芸術は同根で親戚であるが、経済と芸術は他人である」とする。それは、両領域に従事することがとりわけ道徳的に腐敗した時代にあっては困難であることを示すが、なお、Cather は人心を一新する芸術作品に不朽の力を認めていた。

Summary

In my former thesis "From Clover to Cemetery: The View of Life in 'Neighbour Rosicky'", I focused on the pastoral life of the farmer family, interpreting the significance of Romanticism and mythological expressions in the work. Here, I will investigate the tragedy of an artist in "The Sculptor's Funeral" in order to clarify the elements of Symbolism Cather describes in her work through representation of mourning. I also would like to illustrate the meaning of her idea "escapism", which regards economics and fine art as contradictory.

Mr Harvey Merrick, the protagonist is a young successful sculptor on the East coast, who is returned to his village as a corpse accompanied by Henry Steavens, his student. The opening shows the atmosphere of an imaginary town in Kansas: "The snow had fallen thick over everything; in the pale starlight the line of bluffs across the wide, white meadows south of the town made soft, smoke-colored curves against the clear sky". As a setting, wilderness of a snow landscape is worth noticing, not just because Cather often describes immigrants who weather rigorous winter, but its implication in the bleakness of death makes a stark contrast with joy of life in the spring Prairie. Steavens realizes that the villagers waiting for the body have become so materialistic after the Civil War that no one cares about the significance of the palm-leaf on the coffin, which implies one who is martyred (in this case for his art). The villagers are so mean that they even criticize the departed for his not having practical skills.

There is another factor which Merrick may have suffered from, namely the rough behavior of Annie, Merrick's mother. She cannot control her emotion and affects others. In fact, the health of Martin, her husband, deteriorates. In this way, Cather is not simply a celebrant of the carefreeness of rural life, but a critic of the Gilded Era as exhibiting "an ostrich policy" and a loss of principle. The criticism of social injustice is derived from her experience as a journalist. In "Escapism", her essay, she says "Religion and art spring from the same root and are close kin. Economics and art are strangers", which shows the difficulty of those who engage in the two fields especially when it is morally a corrupting age, and yet Cather admits the immortality of the fine art to refresh the human heart.

Key Words: The Tragedy of the Artist, Symbolism, Escapism,

序

「彫刻家の死」(“The Sculptor's Funeral” (1905)) は、暴露的な内容で知られる「マクルアー誌」(“McClure's Magazine” (1893-1929)) に掲載され、のちに『トロルの庭』(*The Troll Garden* (1905)) に収められた。高橋勇二氏は、Sharon O'Brien の分析を踏まえ、Willa Cather (1873-1947) が実際に、画家 Charles Stanley Reinhart (1844-1896) の葬儀における参列者の少なさから人々が芸術に寄せる関心の薄さを実感した事実を紹介している。^①

「彫刻家の死」の執筆された南北戦争後の約30年間は、「金ピカ時代」(Gilded Era)^②として知られ、ホームステッド法(1862)によって人は五年間の開墾の後に土地を所有する権利を得て多くの移民が財を成した。1869年、大陸横断鉄道が Omaha から Sacramento を結び、人の往来が可能となった時代を背景としている。作中の村民は必ずしも芸術家の存在を評価せず、むしろ、法を悪用して利益を得るような抜け目のない人物になることを若者に望むために、実利をもたらさず経済的な負担となる芸術活動は親不孝であると非難する者もある。

物語の冒頭は雪景色の Kansas のある村に列車が湿地を疾走し、汽笛を鳴らしながら赤いサーチライトで辺りを照らしプラットホームに到着する様子が描かれている。^③ 同じ情景を韻文で著した“The Night Express”(詩集 *April Twilights* (1903) に収録)^④ が、汽笛を中心に音声に訴えかけるものであるのに対して、「彫刻家の死」は(煙が)灰色の巨体となって垂れ込めるといふ絵画的なものとなっており、汽笛は田舎の貧弱な少年たちを覚醒させる記述となっている。^⑤

芸術家の悲劇という主題は、後期長編 *Lucy Gayheart* (1934)^⑥ と共通するもので、Harvey は劣悪な家庭環境の中で心を閉ざし貝のように緘黙するようになる。教え子の Steavens は、師が人を敬遠しながらも浮き彫りで理想の世界を作成し、死の床で故郷に帰還することを望んでいたことを回想する。一方、故人と幼馴染みの Jim Laird は、自嘲的で飲酒癖のある弁護士であるが、友人の名誉を守り、自らは法を曲げて利に走っていることを告白し、村民の偽善によって他の若者たちの命も奪われたことを告発する。翌日、Laird は飲酒によって葬儀を欠席し、また後日、訴訟を解決するための道中に風邪をひいて他界して、両者が終に安らかに眠るといふ皮肉な結末となっている。

芸術家の悲劇

Cather は Allan Poe (1809-1849) に関する評伝の中で Poe の形容詞用法には人を「戦慄」(“thrill”)^⑦ させるものがあると認めている。「黒猫」(“Black Cat” (1843)) の冒頭^⑧ の “the most wild, yet most homely narrative” に関して、佐々木直次郎 (1901-1943) は「きわめて奇怪な、またきわめて素朴な物語」とし、Charles Baudelaire (1821-1867) は “Relativement à la très

étrange et pourtant très familière histoire”^⑨と訳している。いずれにせよ、手に余りながらありふれたものであるという矛盾した語りが読者に予告されており、「黒猫」の語り手と「彫刻家の死」のLairdは共に飲酒癖があり、家庭内での凶行（愛猫の眼を刳り抜くことと実母による劇語）という点で共通している。その「ワイルドな」^⑩（“wild”）性格をした登場人物としてHarveyの母親Annieの身体的特徴が以下のように記されている。

There was a kind of power about her [Annie's] face—a kind of brutal handsomeness, even; but it was scarred and furrowed by violence, and so colored and coarsened by fiercer passions that grief seemed never to have laid a gentle finger there. The long nose was distended and knobbed at the end, and there were deep lines on either side of it; her heavy, black brows almost met across her forehead, her teeth were large and square, and set far apart—teeth that could tear. (501)

擬人化された「悲嘆」（“grief”）によっても、Annieの「残忍な恰幅の良さ」（“brutal handsomeness”）が和らげられないことで、彼女の獣のような荒々しさを手懐けることが不可能であることが強調されている。彼女は、息子の遺体と対面に取り乱すが、その二十分後には使用人の些細な不始末に感情を爆発させ叱りつけ怒気を充満させており、その「暴力的で抑制の効かない」（“violent and unrestrained”）様子は以下のようなようである。

From the kitchen an uproar was sounding; when the dining-room door opened, the import of it was clear. The mother was abusing the maid for having forgotten to make the dressing for the chicken salad which had been prepared for the watchers. Steavens had never heard anything in the least like it; it was injured, emotional, dramatic abuse, unique and masterly in its excruciating cruelty, as violent and unrestrained as had been her grief of twenty minutes before. With a shudder of disgust, the lawyer [Laird] went into the dining-room and closed the door into the kitchen. (503) [Underline mine]

下線部のように、Annieの無体な振る舞いが多面的に表現されていることはCatherが風景の中の色彩の変化をよく捉えたように、人の挙措についても注意を向けていたことを示している。Lairdはこの雰囲気「むかつきによる震え」（“a shudder of disgust”）を感じて彼女の怒号が耳には入らぬようにドアを閉め、また、Steavensが閉塞感を覚えた時には代わりに窓を開けてやる。そうした配慮を見せるLaird物腰は、付和雷同する村民とは別に旧友の遺体を乗せた

列車に颯爽と歩み寄る様子が描かれている。

The burly man [Laird] with the disheveled red beard walked swiftly up the platform toward the approaching train, uncovering his head as he went. The group of men behind him hesitated, glanced questioningly at one another, and awkwardly followed his example. (497)

Laird の体軀は「頑強な」(“burly”) ものである。語源として「閨房」(“bower”) が堅牢であるように彼の顔立ち(輪郭) そのものは端正なものであることが Steavens によって観察されており^⑫、かつて有為の人材になろうと努めた面影とも言える。一方、村民は自分の行動に責任をもつのを恐れるが如く右顧左眄ばかりしている。また Laird の「あらゆる方向に繁茂した驚異の赤髭」(“an astonishing cataract of red beard which grew fiercely and thickly in all directions.” (497)) とは対照的に Harvey の父親 Martin は歩みも覚束なく、みすばらしい身なりをしている。

Feeble steps were heard on the stairs, and an old man [Martin], tall and frail, odorous of pipe smoke, with shaggy, unkempt gray hair and a dingy beard, tobacco-stained about the mouth, entered uncertainly. (501)

Martin の髭が「くすんだ」(“dingy”) ものであることは、派生語の「糞山」(“dung-heap”^⑬) を連想させ惨めさが強調されているが、そのような劣悪な環境は Harvey にとって「地獄」(“hell”^⑭) であった。大人たちは、若者が「糞」(“dung”) と同義語の「いかさま師」(“shyster”^⑮: “shit” を語源とする) となり、そのような価値観(“knavery,” “ruffianism”) を受け入れるように仕向けたことの罪を Laird は初めのうちは「乾いた、平坦な調子」(“a dry, even tone” (508)) で感情を押し殺して陳述するが、次第に村民の欺瞞を告発するときには興奮を抑えきれず、最後は神に赦しを乞うている。

一方、村民の中で退役軍人は「甲高い声、囀った」(“a squeaky falsetto,” (497) “chirped” (506)) によって、Merrick 家の遺産について論じ、牛飼いは Harvey の実務能力の欠如と酒害を道徳的に説き、牧師は母方の家系が虚弱体質であることを述べている。このように死者に鞭打つ彼らの口調は「幼稚な熱意」(“childish delight” (507))^⑯ と「内省的な権力」(“reflective authority” (506)) を帯びることは、群衆が他者の失敗を酷評するときに普遍的に見られる現象である。また、敗者を道徳的に優位な視点から訓戒するとき、人は快樂の中で能弁になるという傾向を捉えたものと言えるだろう。

駅舎で屯する若者が「鰻」(eel)^⑰、金融業者の強欲さが「鯨」(shark)^⑱に喩えられており、(村民の)「頭を下げる」(“ducked his head”)^⑲、「彼の首を前に曲げる」(“craning his neck forwards”)^⑳、「彼の重々しく不屈な歩調」(“his gait heavy and dogged” (497))という動物的な反応と所作からは理性よりも本能に支配された凡庸な人間存在が批判的に表現されている。

象徴主義

「彫刻家の死」以前に芸術において象徴主義が台頭したが、1886年、Jean Moréas (1856-1910) は『フィガロ紙』(*Le Figaro*) “Un Manifeste du symbolism”の中で象徴主義詩の特徴を次のように挙げている。

Ennemie de l'enseignement, la déclamation, la fausse sensibilité, la description objective, la poésie symbolique cherche à vêtir l'Idée d'une forme sensible qui, néanmoins, ne serait pas son but à elle-même, mais qui, tout en servant à exprimer l'Idée, demeurerait sujette.^㉑

「彫刻家の死」には御伽噺と歴史小説に上げられる教訓はなく、また、同じ雪景を舞台とした『イーサン・フローム』(*Ethan Frome* (1911))のような写実的な筆致を用いずに、「思想」(l'Idée)に対して「微かな微笑み」(“a feeble smile” (507))あるいは「鈍く、慄き、訴えかけるような表情」(“a dull, frightened, appealing expression” (501))という淡く、微妙な感性の形式を纏わせている。

サンド・シティ (Sand City) の人々は病と死に苦しんでおり、実際に、Harvey は肺病を病み、Laird は心臓を患い、退役軍人は消化不良である。また、若者たちが非業の死^㉒を遂げているが、村民は飲酒と貧困の問題として片付け、その原因に向き合う姿勢が見られない。しかも、喪のしるしとして棺の上に置かれた棕櫚の葉がもつ殉教という宗教的含意について無関心である。

象徴主義によって取り上げられる感情の中で、例えば、「倦怠」(“ennui,” “lassitude”) についてロマン主義が「憂い」(“pensive”) と「物思い」(“plaintive”)^㉓によって表現するのにに対して象徴主義はより「陰鬱」(“gloomy,” “dismal”) あるいは「無気力」(“lethargy”) なものを題材にしている。実際に、Harvey の死顔はいまだに緊張を残していることが Steavens の目を通して眺められている。

The dark hair had crept down upon the wide forehead; the face [Harvey] seemed

strangely long, but in it there was not that beautiful and chaste repose which we expect to find in the faces of the dead. The brows were so drawn that there were two deep lines above the beaked nose, and the chin was thrust forward defiantly. It was as though the strain of life had been so sharp and bitter that death could not at once wholly relax the tension and smooth the countenance into perfect peace – as though he were still guarding something precious and holy which might even yet be wrested from him. (502)

Harvey の面長は母譲りのものであろうが、鼻に深く刻まれた皺と挑むように突き出された顎は生前の苦しみに耐えた相であり、彼の繊細な心にとって些細なことであっても辛い経験として記憶されることは「ひらめくポプラの一葉の影すらも日向の壁に消えることのない刻印を残す²⁴」という譬えからも窺えるだろう。このように、Steavens は Harvey の人生を「再現する」(“reconstruct”) と同時に、その意味を「全一的に理解する」(“comprehend”) ²⁵。浮き彫りに描かれた理想の家族像のなかに、痩せた老女のモデルが母親 (Annie) であるかを尋ねたときに²⁶、Harvey の頬に浮かんだ「鈍い紅潮」(“the dull flush” (504)) は、現実の苛烈な母ではなく、「やさし (い)」母²⁷を希求して、それを芸術作品として創作した自分の意図が見透かされたような羞恥²⁸と古傷に触れられた痛みによるものではなかっただろうか。

逃避主義

Cather は1936年、『コモンウィール』(*Commonweal*) に「逃避主義」(“Escapism”) と題して社会の中での芸術のあり方を保守的な論調で展開している。まず、芸術が社会の中で宣伝活動と義憤を持つべきだという主張に対して、アメリカの原住民が生産性を度外視した装飾品を用いたことを挙げて反駁し、芸術の価値が社会の有用性と必ずしも一致しないことを述べる。ついで、西欧の文化人の功績と芸術作品が人心を一新する力があることを述べ、それらの偉業は、彼らが産業社会からの雑事を免除されているからなし得たとする。その上で、歴史的に人の生来的な驕りを糾弾したのはギリシャの哲人らであって、文学では、『ユリシーズ』(*Ulysses* (1922)) の「腹の奴隷」(“the slaves of the belly”) から、人が身体に限定されていることを述べている。

Cather は、昨今の文学を志す若者が浅薄な経験を利用し、また不自由を託つことに苦言を呈している。歴史上、厳しい検閲下のロシア文学と主題を宗教に限定されたイタリア芸術にかえって優れた作品が誕生したことを挙げている。また、詩人が偉大な作品を作るとき William Wordsworth (1770-1850) の崇高な主題と Percy Shelley (1792-1822) の神秘的で愛らしい叙情詩という規範が必要であることを説いた後に、Poe 以降の昨今の純粋詩に対して批判的な評価

を下し、社会の不正の告発が目的化されると、本来的な芸術の価値を評価できないと指摘している。

「彫刻家の死」の Harvey は、家庭環境で傷つきながらも他者に対して害意を持たず、最善を信じる芸術家であったが、「探究する」(investigate)^③ことを恐れていたために芸術の世界の象徴であるギリシャ神の一つ Nike の許に行くことを断念している^③。しかし、弟子の Steavens によって師 Harvey が触れるものに「手付かずの愛らしさ」(“pristine loveliness” (505))を与える力を認めていたことは、芸術作品が理想を掲げ不朽の価値を保守することを示すだろう。

参考文献

- 近藤のり「梶井基次郎「檸檬」にみる近代と前近代」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』vol. 23, 2017, 18-28.
- 里内克巳「川で起きた悲劇——マーク・トウェインは蒸気船事故をどう描いたか」『言語文化研究』vol.46, 2020, 25-42.
- 佐道直身「日本における象徴主義の概念」『埼玉医科大学進学課程紀要』vol.8, 2000, 27-35.
- 高橋勇二「キャザーの描く芸術と芸術家たち」『龍谷紀要』40 (2), 2019, 89-104.
- 「ウィラ・キャザーとドロシー・キャンフィールドとの不和——「横顔」における傷痕の意味するもの」『龍谷紀要』vol.36 (2), 2015, 91-110.
- 中川裕二「ボードレールの〈小散文詩〉「髪の中の半球」と「旅への誘い」」*Stella*, vol.12, 1993, 95-123.
- 藤本雅樹「アルカディアの行方——ロバート・フロストとエドウィン・アーリントン・ロビンソン」『龍谷大學論集』vol.493, 2019, 112-136.
- フェアバンクス香織「梶井基次郎「檸檬」における西洋モダニズムへの眼差し——憂鬱、セザンヌ、そして「私」の描き方」『文京学院大学外国語学部紀要』vol.19, 2019, 19-33.
- 松岡信哉「ウィリアム・フォークナーの断片化と総体化の技巧——20年代から30年代にかけての、長編作品と短編作品の相関関係」龍谷大学学位請求論文, 2005.
- モレアス・ジャン（宮田佳範訳）『象徴主義第一の武器』京緑社, 2018.
- Bass, Eben. “The Sculptor of the Beautiful”, *Colby Quarterly*, vol.14, 1978, 28-35.
- Cather, Willa. *Willa Cather — Stories, Poems, and other writings* —, Library of America, 1992, Edited by O'Brien, Sharon.
- Marinier, Carine, et al. *Dictionnaire anglais-français, français-anglais*, Larousse, 2016.
- O'Brien, Sharon. *Willa Cather: The Emerging Voice*, Oxford UP, 1987.

註

- ① 高橋は芸術家の孤独と病を主題にした短編として“Death in the Desert”と“A Wagner Matinee”を挙げる。
- ② Mark Twain と Charles Dudley Warner の共著 *The Gilded Age: A Tale of Today* (1873) に由来する。
- ③ The night express shot, red as a rocket, out of the eastward marsh lands, and wound along the river shore under the long lines of shivering poplars that sentineled the meadows, the

escaping steam hanging in gray masses against the pale sky and blotting out the Milky Way. In a moment the red glare from the headlight streamed up the snow-covered track before the siding and glittered on the wet, black rails. (497)

- ④ From out the mist-clad meadows, along the river shore,
The night express-train whistles with eye of fire before.
A trail of smoke behind her enclouds the rising moon
That gilds the sighing poplars and floods the wide lagoon.
Through yellow fields of harvest and waving fields of corn
The night express-train rumbles with whistle low and lorn.

<https://cather.unl.edu/writings/books/0005> (The Willa Cather Archive)

- ⑤ Just then a distant whistle sounded, and there was a shuffling of feet on the platform. A number of lanky boys of all ages appeared as suddenly and slimily as eels awakened by the crack of thunder; some came from the waiting-room, where they had been warming themselves by the red stove, or half asleep on the slat benches; others uncoiled themselves from baggage trucks or slid out of express wagons. Two clambered down from the driver's seat of a hearse that stood backed up against the siding. They straightened their stooping shoulders and lifted their heads, and a flash of momentary animation kindled their dull eyes at that cold, vibrant scream, the world-wide call for men. It stirred them like the note of a trumpet; just as it had often stirred the man who was coming home tonight in his boyhood. (498)

- ⑥ 音楽を志す Lucy Gayheart はシカゴで師 Clement Sebastian と出会うが、死別によって失意のうちに帰郷する。そこで、実利を重んじる姉と老いた父の元で気を病み、最終的に憤怒の念に駆られて外へ飛び出して事故死する。後悔しながら過去を回想することは Lucy の知己で弁護士の Harry によってなされる。

- ⑦ “Who could delight you with his noun and disgust you with his verb, thrill you with his adjective and chill you with his adverb, make you run the whole gamut of human emotions in a single sentence?” (896)

- ⑧ “For the most wild, yet most homely narrative which I am about to pen, I neither expect nor solicit belief.”

<https://www.eapoe.org/works/tales/blcatd.htm>

- ⑨ https://fr.wikisource.org/wiki/Nouvelles_Histoires_extraordinaires/Le_Chat_noir

- ⑩ “wild” の語義について、*Larousse* は、野草と野獣を修飾する「野生」(“sauvage”)の基本的な意味に加えて、天候に関する「荒天」(“gros”)あるいは「蓬髪のような乱れ」(“débraillé”)を挙げている。作中の Harvey の遺体は降雪の寒村に帰還し、Larid は蓬髪をしている。

- ⑪ “I think I’ll see whether I can get a little air. The room is so close I am beginning to feel rather faint,” murmured Steavens, struggling with one of the windows. The sash was stuck, however, and would not yield, so he sat down dejectedly and began pulling at his collar. The lawyer came over, loosened the sash with one blow of his red fist, and sent the window up a few inches. (503-04)

- ⑫ “Steavens looked at him earnestly, puzzled at the line of the chin, and wondering why a man should conceal a feature of such distinction under that disfiguring shock of beard.” (504)

- ⑬ “That is the true and eternal wonder of it, anyway; that it can come even from such a dung-

heap as this," the lawyer cried, with a sweeping gesture which seemed to indicate much more than the four walls within which they stood.

- ⑭ ["The old woman is a fury; there never was anybody like her for demonstrative piety and ingenious cruelty. She made Harvey's life a hell for him when he lived at home; he was so sick ashamed of it. I never could see how he kept himself so sweet." (503)
- ⑮ "Well, I [Laird] came back here and became the damned shyster you wanted me to be..." (510) Laird が村民を糾弾する場面。
- ⑯ "Everyone chuckled, and the Grand Army man rubbed his knees with a spasm of childish delight." (507)
- ⑰ "A number of lanky boys of all ages appeared as suddenly and slimily as eels wakened by the crack of thunder;" (498)
- ⑱ "land-poor sharks as the here-present financiers of Sand City" (510)
- ⑲ [T]he Grand Army man ducked his head when he saw the spark in his blue, blood-shot eye. (508)
- ⑳ Presently he was approached by a tall, spare, grizzled man clad in a faded Grand Army suit, who shuffled out from the group and advanced with a certain deference, craning his neck forward until his back made the angle of a jack-knife three-quarters open. (497)
- ㉑ <https://www.berlol.net/chrono/chr1886a.htm>
「思想 / 「理念」 ("l'Idée") 「(比喩的に) 家臣 / 下」 ("sujette")
- ㉒ ["Why did Reuben Sayer, the brightest young lawyer you ever turned out, after he had come home from the university as straight as a die, take to drinking and forge a check and shoot himself? Why did Bill Merrit's son die of the shakes in a saloon in Omaha? Why was Mr. Thomas's son, here, shot in a gambling-house? Why did young Adams burn his mill to beat the insurance companies, and go to the pen?" (508-09)
- ㉓ My pensive Sara! thy soft cheek reclined
Thus on mine arm, most soothing sweet it is
To sit beside our Cot, our Cot o'ergrown
With white-flowered Jasmin, and the broad-leaved Myrtle,
(Meet emblems they of Innocence and Love!)
And watch the clouds, that late were rich with light,
Slow saddening round, and mark the star of eve
Serenely brilliant (such would Wisdom be)
Shine opposite! How exquisite the scents
Snatched from yon bean-field! and the world *so* hushed!
The stilly murmur of the distant Sea
Tells us of silence. [Italics mine] "The Eolian Harp"
<https://www.poetryfoundation.org/poems/52301/the-eolian-harp> (Poetry Foundation)
- ㉔ [T]he mere shadow of a poplar leaf flickering against a sunny wall would be etched and held there forever. (505)
- ㉕ Steavens went on and on, reconstructing that whole miserable boyhood. (504-05)
- ㉖ Oh, he [Steavens] comprehended well enough now the gentle bitterness of the smile that he had seen so often on his master's lips! (504)

- ②⑦ He [Steavens] remembered that once, when Merrick returned from a visit home, he brought with him a singularly feeling and suggestive bas-relief of a thin, faded old woman, sitting and sewing something pinned to her knee; while a full-lipped, full-blooded little urchin, his trousers sustained by a single gallows, stood beside her impatiently twitching her gown to call her attention to a butterfly he had caught. Steavens, impressed by the tender and delicate modelling of the thin, tired face, had asked him if it were his mother. He remembered the dull flush that had burned up in the sculptor's face. (504)
- ②⑧ 「やさし (い)」は大和言葉の動詞「や (瘦) す」を形容詞化したものである。「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」(『万葉集』八九三)に「憂し」と併記されているように、Harvey が母親に人を面罵する豪快さではなく「やさしさ」と「憂い」を求めていることは、浮き彫りに描かれた「痩せ、疲れた顔」(“the thin, tired face”)に見える。
- ②⑨ He [Harvey] was so sick ashamed of it (fury of his mother). (503)
- ③⑩ “Was he [Harvey] always a good deal of an oyster?” he asked abruptly. “He was terribly shy as a boy.” “Yes, he was an oyster, since you put it so,” rejoined Steavens. “Although he could be very fond of people, he always gave one the impression of being detached. He disliked violent emotion; he was reflective, and rather distrustful of himself—except, of course, as regarded his work. He was sure-footed enough there. He distrusted men pretty thoroughly, and women even more, yet somehow without believing ill of them. He was determined, indeed, to believe the best, but he seemed afraid to investigate.” (504)
- ③⑪ I [Harvey] shan't have much to fear from the judgment of God. (507) The wings of the Victory, in there—with a weak gesture toward his studio—“will not shelter me.”
- WCA による *McClure's Magazine*, 24 (January 1905): 329-336. のテキストは下線部を含む。